

がんと検診

今や2人に1人が何らかの癌になり、3人に1人が癌で亡くなるといわれています。一方、医学技術の進歩により、初期の胃がんや大腸がんはお腹を切り開かなくても、内視鏡で切除することができるようになったりと、患者さんへの体の負担を大きく減らすことができます。

がんは手術で完全切除ができれば、そのがん細胞がゼロになるので治ることができ、治療も一回で済みます。しかし、気づかないうちに進行して手術ができない段階になってしまうと、抗がん剤や放射線治療では体内のがん細胞を完全にゼロにすることは難しくなります。再発すると抗がん剤の種類を変えたり工夫をしますが、繰り返しながら徐々に進行して最後には命を奪われることとなります。何度も入退院を繰り返さなくてはならなくなり、副作用もあります。その長い過程は、精神的にも、肉体的にも、金銭的にも、ご本人と支えるご家族に大きな負担となります。

ですので、大切なことは検診等による早期発見、早期治療です。

- 生涯でがん罹患する確率は、男性54% (2人に1人)、女性41% (2人に1人)。

部位	生涯がん罹患リスク(%)		何人に1人か	
	男性	女性	男性	女性
全がん	54%	41%	2人	2人
食道	2%	0.4%	52人	246人
胃	11%	6%	9人	18人
結腸	5%	5%	19人	21人
直腸	3%	2%	34人	51人
大腸	8%	7%	12人	15人
肝臓	4%	2%	26人	50人
胆のう・胆管	1%	2%	69人	61人
膵臓	2%	2%	54人	52人
肺	9%	4%	12人	26人
乳房(女性)*1		6%		16人
子宮*1		3%		32人
子宮		2%		46人
子宮頸部		1%		94人
子宮体部		1%		103人
卵巣		1%		93人
前立腺	6%		16人	
悪性リンパ腫	1%	1%	74人	94人
白血病	0.7%	0.5%	138人	184人

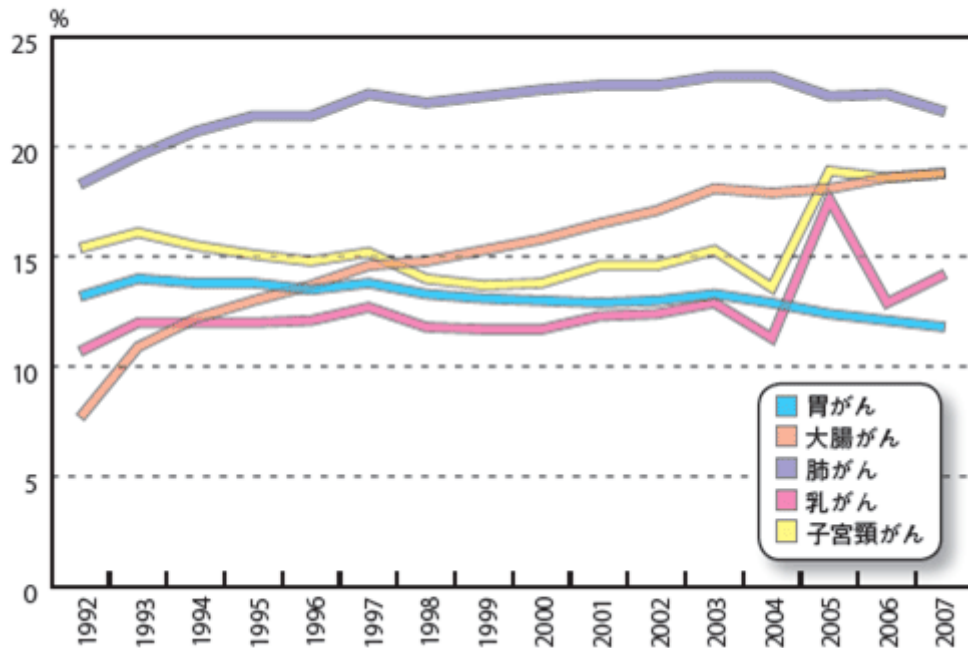
*1上皮内がんを含む。

上の表を見てみてください

男性なら胃がんは11% (9人に1人)、直腸と結腸を合わせた大腸がん8% (12人に1人)、肺がんは9% (12人に1人)の方が生涯のうちに一度はがんになります。あわせるとこの三つのがんだだけで、28% (3.4人に1人)となります。これに前立腺癌6%を加えると34% (2.9人に1人)です。3人に1人以上の確率といえば親、兄弟の中で誰か、夫婦のどちらかがこれらのがんなくてもまったく不思議ではないわけです。

もうお分かりですね。このような理由で国は胃がん検診 (胃カメラやバリウム)、大腸がん検診 (便潜血や大腸カメラ)、肺がん検診 (レントゲンやCT)、前立腺がん検診 (PSA採血)を積極的に勧めているのです。

図 2 対策型検診におけるがん検診受診率の推移



ところが、図2は日本全体での統計ですが、がん検診受診率はどのがんでも10～20%程度しかありません。

自分はならないだろう、まだまだ大丈夫だろう、どこも悪くないから大丈夫、がんのことなんて考えたくない、悪い検査結果を聞くのが怖い、お金が勿体ない、そういった根拠のない思い込みや将来への想像力のなさが問題です。未来の自分たちの健康を自分たちで守りましょう。

× 自分はならないだろう

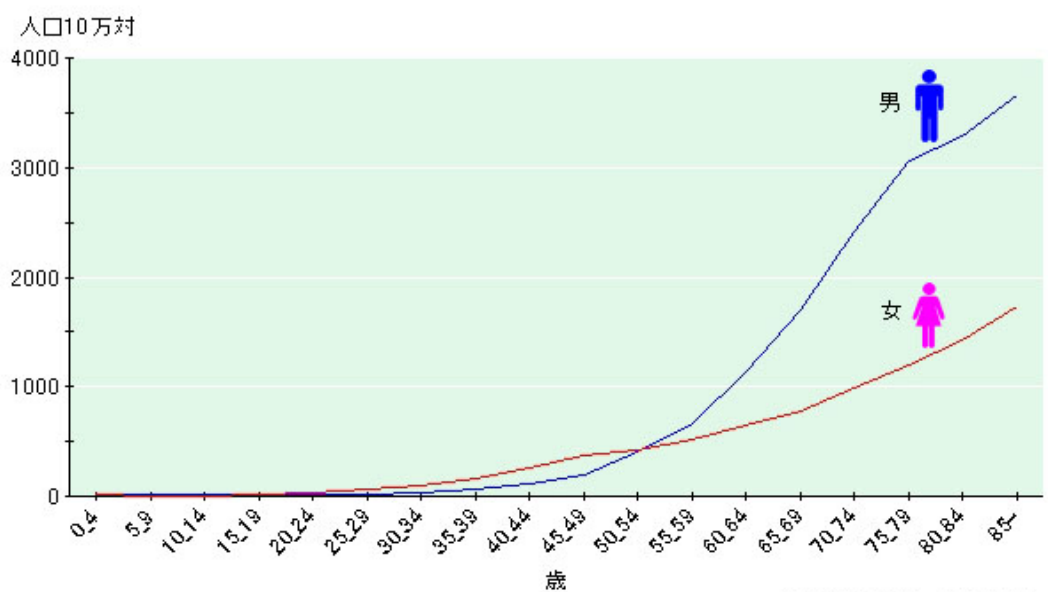
⇒ 繰り返しますが、がんになる確率は1/2の確率です。自分だけでなく、家族や周りの親しい人ががんで苦しまないためにも、お互いに誘いあって検診、検査を受けるべきです。なかには親兄弟にがんの方がいないので自分は大丈夫とおっしゃられる方もいますが、遺伝的にがんになりやすい家系があるのは確かですが、しかし、それ以外の家系の方はあくまで1/2の確率があるのです。

× まだまだ大丈夫だろう

⇒ 年齢とともにがんにかかる率は上昇します。しかし20歳代でもがんにかかる方はいます。下のグラフからもわかるように、40歳代から急増します。40歳代からの年に一回のが

がん検診の受診でがん死亡率が下がることが分かっていますので、国でも40歳以降の方に定期検診を勧めているのです。

年齢階級別がん罹患率
【全部位*1 2005年】



*1 乳房と子宮頸部の上皮内がんを含む。

資料: 独立行政法人国立がん研究センターがん対策情報センター
Source: Center for Cancer Control and Information Services,
National Cancer Center, Japan

また、「もう年だからがんになってもいいから検査はしない!」と豪語される方も多くいらっしゃいます。しかし、上のグラフでおわりの通り高齢者ほどがんができるのです。がんは長生きした結果なのです。せっかく長い間、いろいろありながらも苦勞して過ごしてきて、ようやく今の生活があるのに、最後がんで苦しんで入退院を繰り返して、ご家族も苦勞をすることになります。それは正しい考え方でしょうか?がんではピンピンコロリとはいきません。終わりよければすべてよしといえます。人生の最後が大変なことにならないように、定期的ながん検診、検査をお勧めします。

※ 付け加えておきますと高齢者のがんは進行が遅いというのは根拠のない迷信です。

× どこも悪くないから大丈夫

⇒ がんで症状が出て来るのは進行してからです。初期の段階ではまったくと言っていいほど症状はありません。胃がん、大腸がんなら出血、食べ物や便のつまり、肺がんなら喀血、長引く咳などが見られたときには、すでにほとんどが進行がんとなっています。早期発見するためには、症状がないうちから定期的に検診、検査を受けることが大切なのです。

× がんのことなんて考えたくない、悪い結果が出るのが怖い

⇒ 二人に一人ががんになりますので、現実には正しく目を向けて、後で後悔しないようにしましょう。放っておけばどんどん進行するのががんです。繰り返しになりますが、本当の悪い結果になってしまわないように、早期発見のための検診、検査を受けましょう。

また検査自体が怖いという方もいらっしゃると思いますが、経鼻内視鏡など医療機器の進歩で、患者さんの負担が少なくなってきていますのでご安心ください。

× お金ももったいない

⇒ 市の検診や医療保険で検査を行うと数百円から数千円ですみます。とくに松本市は補助が手厚い地域です。一方、進行がんになると手術で数十万円、抗がん剤治療も一本が 20 万円ほどのお薬もあります。なによりも体や精神的負担、そして命はお金にはかえられません。

以上、がんが誰にでも起こりうる病気であり、一方、早期発見により治せる病気であることをご理解いただけましたでしょうか？

ご家族やご友人などの大切な方々とお誘いあわせのうえ、主治医にいつでもお気軽にご相談ください。

※ 表、図はすべて国立がん研究センターのホームページより転載しています。